

80回目の約束 あなたと紡ぐ平和―



※平成27年当時の写真

1945年6月。多くの民間人が巻き込まれ、尊い命を落とした沖縄戦が終結した。長い年月が経った今もなお、戦争の傷跡は市内各地に悲しみの記憶として残る中、凄^{せひ}惨な戦の世を渡り歩いた先人たちは、過去の痛みに耐えながら、平和な現

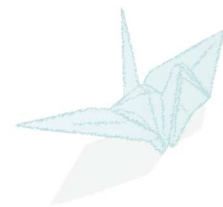
代を築き、守り、私たちに未来の平和を託した。

しかし、世界を見渡せば紛争が絶えず起こり、沖縄に生きる私たちも世界情勢の変化によって、日々の平和が脅かされようとしている今、過去を知り、あらためて平和とは何かを考えなければいけない。

戦後80回目を迎えるこの夏。過去の出来事を知り、先人の思いに心を寄せながら、子どもたちへ、そしてその先の未来へ平和のバトンを手渡すために、平和の意味を見つめなおそう。



記憶に刻まれた戦争



喜納トヨさんの証言

沖縄戦では、多くの住民が壕での生活を余儀なくされました。激しい戦闘の中、家族で支え合いながら幾度も壕を移動し、生死の狭間を生き抜いた体験があります。当時14歳だった女性が語る戦争は、日常をどのように変え、人々にどれほど深い傷を残したのかが見えてきます。



喜納トヨさん(94歳)

1930(昭和5)年、字真栄平で大城家の長女として生まれる。戦後、18歳で結婚し、夫とともに農業を営み、5人の子宝に恵まれる。現在は孫5人、ひ孫5人にまで恵まれ、週に2度のデイサービスを楽しみに生活する。

近づく沖縄戦

私の家族は父、母、妹2人、弟2人の7人で、両親は農業をやっていた。芋とキビを育てながら、オトーは警防団にも入っていた。

戦争が近づく、住民は屋敷に穴を掘って屋敷壕を作った。ここに味噌や塩、米など保存できる食べものを保管していた。オトーはこのころ兵隊にとられてしまった。

昭和20年3月23日は真壁国民学校の卒業式前日で、予行演習の予定だったけど、空襲警報が鳴ったから途中で家に帰らされた。この日から壕での生活が始まった。

壕での避難生活

最初に避難したのは、集落のはずれにあるアギルンという場所の壕だった。ここは大きくて、7家族くらいが避難していた。食料は屋敷壕にあったから、オカーが家に戻って料理して、壕まで持つ

できてくれた。私たち子どもはずっと壕の中にいて、私が幼い妹たちのお世話をしていた。2か月くらいこんな生活をしてんだけど、ある日米軍の攻撃で壕が使えなくなりましたから、みんな次の避難壕を探したわけよ。

次に避難したのは、テーシという場所の壕だったね。入ってしばらくすると日本兵が来て「出て行きなさい」と追い出されてしまった。仕方がないから、集落の近くに

生死を分けたウフヤマ

集落南の、ウフヤマという大きな岩があるところに壕が4つあったから、どれかに入ろうとした。すると、壕の側に汲んだ水を溜めておくカミ(水瓶)みたいな、黒くて丸いものがあってね。どうしてここにあるんだろうと思ったら「あれは死んだ人だよ」と教えられた。死体を間近に見るのは初めてだったからびびりしたが、同時に、

みんな戦争でいつか死ぬんだって思った。

ウフヤマの壕には、私たちともう1家族が入った。だけど、ここも攻撃で崩れてしまつて、すぐに出ないといけなくなった。隣の壕に行くと、既に3家族が入っていて、これから集団自決すると言っていた。私たち家族も、米軍の捕虜になるくらいなら死んだ方がいと思って、「一緒に死なせてくれ」って頼んだわけ。するとそのスー(お父さん)が、「手りゅう弾は2つしかない。あんたらと一緒だとシニカンティーする(死に損なう)」と言って、入れてもらえなかった。このときはもう、みんな死ぬと思ってるから「私たちも命は惜しくない」と何度もお願いしたけど、だめだった。

さらに隣の壕に行ったら、ここでも「いっぱいだから入れない」と言われた。でも行くあてもないさーね。「入り口でもいい」と頼むと、中にいたハワイ帰りのお父さんに「晩はここで過して、明日の朝

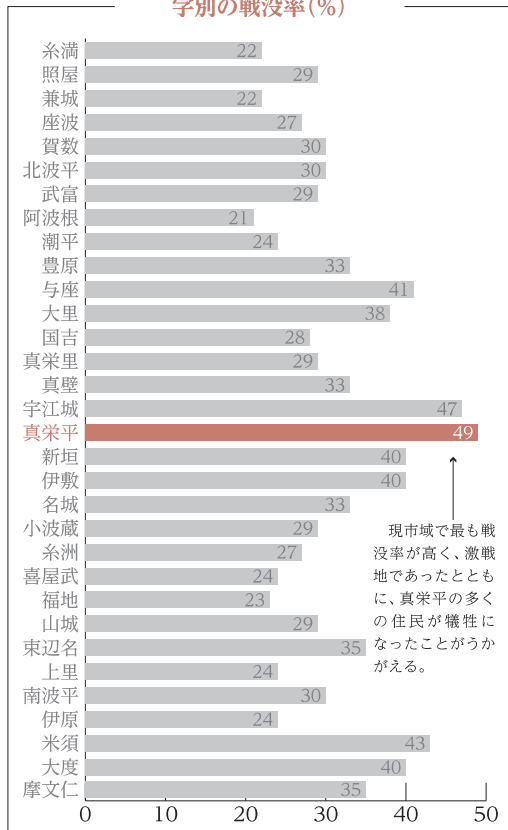


▲数年前のウフヤマ。現在は真栄平の住民によって、きれいに整備がなされた。

戦後の生活と今の思い

6月23日からはね「戦争は終わったから出てこい」って、スピーカーから米軍の放送が流れていた。でもね、私はそのころ、日本軍が真栄平の人を虐殺したという話を聞いていたから、外に出るのが怖かった。なかなか出

字別の戦没率(%)



過去の証言と糸満市史

沖縄戦における糸満市の情報は、『糸満市史 資料編7 戦時資料上巻』『同下巻』で詳しく紹介しています。また、広報いとまでは、慰霊の日にあわせて戦争体験者の証言を掲載しています。過去の記事は2次元コードから確認できます。

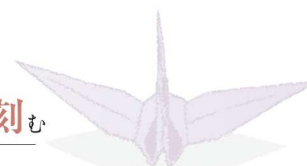


過去の記事はこちらから



Chapter 2 歩みを刻む

戦後から今へ 時代を築く



焼けたまち。米軍の統治。本土復帰。笑顔を取り戻していく人々。80 年前のあの日から今日まで、さまざまな困難に直面しながらも、人々は歩みを刻み続けてきました。

紙面には到底収まらない数々の出来事。先人たちが歩んできた道のりを年表と写真で少し振り返ってみましょう。

1944(昭和19)年8月	1945(昭和20)年11月	1945(昭和20)年6月	1945(昭和20)年5月	1945(昭和20)年4月	1945(昭和20)年3月	1945(昭和20)年4月	1945(昭和20)年5月	1945(昭和20)年6月	1945(昭和20)年12月	1946(昭和21)年4月	1946(昭和21)年5月	1946(昭和21)年6月	1946(昭和21)年8月	1946(昭和21)年9月	1946(昭和21)年10月	1947(昭和22)年6月	1952(昭和27)年	1953(昭和28)年	1961(昭和36)年7月	1961(昭和36)年10月	1971(昭和46)年12月	1972(昭和47)年5月	1979(昭和54)年2月	1989(平成元)年	1993(平成5)年	1995(平成7)年6月	1996(平成8)年4月	2002(平成14)年	2014(平成26)年	2020(令和2)年7月	2022(令和4)年5月
---------------	----------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	-------------	-------------	---------------	----------------	----------------	---------------	---------------	------------	------------	--------------	--------------	-------------	-------------	--------------	--------------

兼城・真壁・摩文仁国民学校の児童らが学童疎開のため、那覇港を出港。出港翌日、対馬丸が撃沈。米機動隊による沖縄大空襲(10・10空襲)。

米軍、沖縄本島での空爆を本格的に開始。米軍、沖縄本島南部西海岸に上陸。日本軍は首里を放棄し、南部撤退を決定。司令部を摩文仁に移す。

6日・米軍が北波平を占領。市域で初の占領。16日・米軍が与座岳の頂上一帯を占領。日本軍最後の防衛線が崩壊。

21日・米軍が摩文仁一帯を占領。米軍ニミッツ提督が日本軍の組織的戦闘の終了を宣言。

23日・牛島司令官、長参謀長自決。日本軍の組織的戦闘が終了し、市域での戦闘がほぼ終了する。

県内各収容所より、糸満町民と高嶺村民の一部が糸満町へ、兼城村民が字兼城へ移動開始。また、名城海岸に南部区が設置され、高嶺(一部)、真壁、喜屋武、摩文仁の各村民を収容。

兼城村民、字兼城より各字に移動開始。

真壁、喜屋武、摩文仁村が合併し、三和村となる。

南部区の住民が段階的に各字へ移動開始。

戦後初の糸満ハレー開催。

軍政府より三和村の一部に立ち入り禁止が出され、字に戻っていた住民は、近隣の字に強制移転される。



1. 真栄平で砲弾をかかわす米軍の戦車 2. 轟壕から出てくる住民とそれを支える米兵 3. 轟壕で投降する住民とそれを見守る米兵
4. 糸満に収容された住民を手当する看護要員 5. 轟壕から出てくる住民と日本兵 6. 糸満救護所で幼児にお菓子を与える米兵
7. 米海兵隊司令部が設置された白銀堂 8. 糸満救護所で傷を負った幼児を手当する米兵 (1~8は沖縄公文書館所蔵)

糸満町で戦後初の綱引き開催。

学童疎開児童ら、佐世保港を出港。

軍民連絡会議、三和村全域への帰還を許可。

糸満町新公設市場落成。

入母屋造りに赤瓦ぶきの白銀堂落成。

琉球政府が慰霊の日を制定。

糸満町・兼城村・高嶺村・三和村が合併し、新たな糸満町が誕生。

市制施行。糸満市となる。

沖縄県本土復帰。沖縄の施政権返還、沖縄県発足。

糸満市平和都市宣言。

市人口5万人突破。

摩文仁の平和祈念公園内に「国立戦没者墓苑」を建設。

平和祈念公園で「平和の礎」除幕。

1万余の市出身戦没者を祀った「満霊之塔」が糸満市遺族会により建立。

糸満市役所新庁舎落成。

市人口6万人突破。

糸満市場いとまゐる落成。

糸満市観光文化交流拠点施設くくる糸満落成(出典)糸満市史資料編7 戦時資料上巻 糸満市市勢要覧2021



9. 糸満町消防団結成式(1949) 10. 1967年の白銀堂 11. ひめゆりの塔を参拝する現上皇と上皇后(1975) 12. 右側通行時の糸満ロータリー(1978) 13. 西崎総合体育館で海邦国体のバドミントン競技開催(1987) 14. 第1回糸満市文化祭(1990) 15. 旧公設市場の様子 16. 市役所新庁舎落成式 17. 市人口6万人突破認定証交付式 18. 東京2020オリンピックで聖火ランナーを務める市出身の玉城美香さん(2021) 19. 糸満市場いとまゐるオープン式典 20. シャボン玉石けん くくる糸満記念式典

受け継ぐ 想いと平和

糸満市では、「戦争を知らない世代の、さらに子や孫である若い世代」へ沖縄戦の実情や歴史を後世に伝える人材を育成することを目的に、平和の語り部育成事業を行っています。

平和を次の世代へどう伝えるか。平和ガイドや平和の語り部育成事業に関わる3人が、それぞれの経験をもとに語ります。

平和に対する想いの変化

石井彩絵さん(以下、石井)

平和の語り部育成事業に参加して、平和について本格的に学んだとき、「自分は何も知らなかったんだ」と思いました。学校で学んでいたつもりでしたが、それはほんの一部だったんです。戦争のことも、平和の意味も、実際に戦争体験者の話を聞いたり、戦跡を訪れたりする中で、初めて実感して理解できる

ようになりました。それに、この事業に参加する中で、戦争や平和について学び、知識が広がったこと以上に、学んだことを伝えていきたいという気持ちになりました。今後は海外に留学して、国外から見た沖縄戦を知り、広い視野で平和について考えながら、沖縄戦のことも海外に発信していきたいです。

井出佳代子さん(以下、井出)

私も移住して気づいたことですが、沖縄は慰霊碑

や戦争の傷跡が今も日常の風景に溶け込んでいて、当時の記憶を残し続けている。もちろん、沖縄以外にも空襲や原爆の投下もありましたが「生活の場が戦場になる」というのか」ということを沖縄にいると強く感じます。現在は平和ガイドとして事業に携わっていますが、子どもたちから「命って何?」「どうして戦争は起きたの?」というまっすぐな問いに、私たちがどう答えるか。その答えを一緒に探す過程がまた学びになります。

上原大空さん(以下、上原)

私は担当職員として事業に関わっていますが、それまでは「平和」という言葉を表面的にしか理解してい



▲慰霊碑をガイドする井出さん

なかったことに気づき、自身の勉強不足や、歴史認識の希薄さを思い知らされました。また、私自身は最近祖父を亡くし、日常の一部だった存在が突然いなくなるという経験をしたことが、平和について意識が変わるきっかけでした。それ以来、命の尊さについて深く考えるようになり、仕事としてではなく、1人の人間として「平和って何だろう?」と自問するようになりました。

平和の伝え方

石井 私たちの世代は、戦争を経験した人が身近に

いなくて、だから戦争は遠い話になり、学ぶ意欲が沸かない。でも、語り部の活動を通して知った「戦争のリアル」は、誰かが伝えていかなければ忘れられてしまう。だからこそ、私たちの世代がそのリアルを知り、伝えていく必要があると思います。ただ、現在

の教育現場で行われている平和学習では、戦争の内容を伝えることが重要視されているように思うので、小さい時から「平和って何だろう」と考える機会を作ってあげることが大切だと思います。



▲研修の成果を発表する石井さん

井出 そうですね。でも、戦争のリアルを知るとい

ことも重要だけど、戦争の話は残酷で、見聞きするとつらいもの。誰に対しても同じように伝えることができないから、伝え方を工夫する必要があります。それに、戦争が起こったことは重く受け止めなければいけないけど、語り部活動は戦争の悲惨さを伝えるだけでなく、その先に「だから私たちはどのよう

に生きて、どのように平和をつなぐか」という問いかけも必要。「戦争は悲惨」「いまは平和で良かった」で終わってしまつては意味がない。学んでもらったことを今の社会に照らし合わせて「自分たちがどうやって平和な世の中を継続させていくか」ということを日頃から考えてもらえるようにすることが大切ですね。

上原 平和という言葉はよく見聞きする言葉ですが、

平和を考えようという難しい印象を持たれると思います。でも、日常の中に平和を実感できる瞬間は多く、その何気ないときが「平和のかたちだ」と思いますし、石井さんが話したように、それを感じ取る感性を育てることも大事なことだと思います。

私たちにもできること

井出 私の夫は持病があり、戦争によつて治療ができな

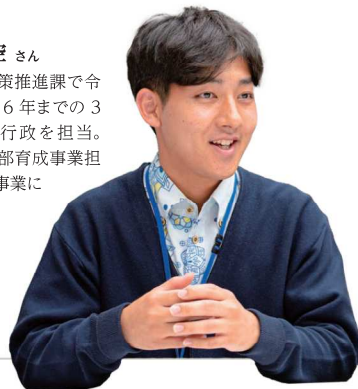
くなった時点で命がつか

上原 戦跡や慰霊碑が残

りの平和に気づくこと」から始めてほしいです。友達と笑ったり、家族とご飯を食べたり、その「当たり前」がどれほど大切か気づいてもらえたら、自然と自分なりの平和を知ることができると思います。そして、少しでも戦争や平和について興味を持ったら、自分で戦争を勉強したり、語り部育成事業などの場に参加してほしいです。年齢や立場を問わず、誰でも「語る側」になれる可能性があります。一緒に平和をつなげていきましょう。

うえはら
上原 大空さん

企画部政策推進課で令和4年から6年までの3年間、平和行政を担当。平和の語り部育成事業担当者として事業に携わる。



い で かよこ
井出 佳代子さん

神奈川県出身で、東京、イギリス、長野を経て2012年から糸満市在住。来沖後から平和ガイドの勉強を始め、現在は糸満市観光ガイドのほか、県内各平和ガイド団体で活動している。



いしい さえ
石井 彩絵さん

那覇国際高等学校2年生。糸満中学校1年時に初めて平和の語り部育成事業へ参加。以降、4年連続で同事業へ参加し、2024年度の事業では補助者として、事業のサポートを行う。



沖縄戦を追体験する一。

轟壕 360°バーチャルツアー

沖縄戦を語り継ぐ「物語わぬ語り部」として重要な役割を果たしてきた轟壕ですが、近年は安全確保のため、立ち入りが制限されていました。そのため、糸満市では、最新のデジタル技術を活用し、現在の壕内を360°自由自在に見ることができるバーチャルツアーを公開しています。

慰霊の日を前に、過去の出来事を知るため、一度閲覧してはいかがでしょうか?



バーチャルツアーは、2次元コードから閲覧できます。



確かに、静かに、
平和をつないでいくために――。



沖縄戦終結から80年。あの戦争を体験した人々の声を、私たちが直接聞ける機会はこれからますます減っていきます。そして、戦争は「過去の出来事」として語られる時代がやってきます。そのとき、私たちは先人たちに託された平和を大切にし、守り、未来へと手渡していけるのでしょうか。

「平和」とはなにか――。辞書には「戦争や争いがなく、穏やかな状態」とあります。いつもの朝。通い慣れた道。家族の笑い声。私たちが当たり前に過ごしている身近なこの日常こそが、「平和」のカタチだと。

ただ、その日常が脅かされたとき、多くの人は正義の名の下に戦いを選んでしまう。見えなくて、触れら

れないからこそ、相手の平和を想像することは難しく、すれ違いや争いが生まれてしまうのかもしれない。

でも、自分にとって大切なものがあるように、誰かにとっての大切なものも、きっとある。もし、その違いを超えて、互いの平和を認め合うことができたなら、私たちはもう少し優しい世界を作れるはずです。

何が正しいのか、何を信じるのか。それぞれの答えがすぐに見つからないかもしれない。それでも、今ある日常を少しでも深く見つめてみてください。守りたいものの、大切にしたい誰かの顔がきつと浮かんでくるはずです。そして、そうした想いを胸に、私たちは進んでいくでしょう。